

諸先達の言葉から

諸先達の残された言葉に時にはその慧眼に深く感動し、時には驚きの念を新たに、時には思わずほほがゆむることがある。座右の書から一文を紹介したい。

京都大学農学部創設に当たられた大杉 繁先生（土壌学）の創設のころを書かれた一文より：「地ならしが進むとともに、あちこちから、お地藏さんが相当沢山に出てきたが、当分はそのままに雨露にさらされておった。一方では農学部の創立の仕事が段々年を経るうちに、関係者の中には病気になったり、あるいは死亡した人もいた。こうなると世間では、これはきつと掘り出されたお地藏さんのたたりだから、早く適当な場所に集めてほこらを作って、祭らなければいけないとか、というような声も起り、総長はじめ有志の寄附を集め、まずお地藏さんを祭った。また本館玄関前の広場で盆踊りも催され、なかなか盛況であった。そのためかどうか、その後は関係者にひとりも故障は出なかった」。

第 12 代農芸化学会会長を務められた武居三吉先生の終戦直後のころを思い起された一文より：「終戦直後に農学部ブームがあった。戦中戦後を通じて食糧不足のために官民ともに食糧生産にたいする関心はつよく、農村の人々は『百姓百姓』と今まで呼び捨てにしていたお役人が『お百姓さん』だの『農村のみなさま』なんて呼びかけているので他人のこのように聞えるという笑った時代である。農学部入学志願者は俄然ふえて農芸化学への入学難は史上最高という年が 2~3 年あった。1950 年ごろになり、食糧事情も緩和されるにつれてこのブームも泡のように消え去った。人間も動物の一種である以上食物に対しては、かくも敏感なのかと思えば哀れでもあり情なくもなった。（途中略）工業界に多くの人材を必要とするために農業方面に向う人が少なくなるのは止むを得まい。そこで日本の将来の食糧問題を担当するこの少ない農学者を、できるだけ有効に育てることである。（途中略）大学の研究は農業生産に関する未知の分野にたいする基礎研究でなければならない。農業は応用生物学である。農学は農業を指導する基礎生物学である。Mendelism が生まれた頃、あの理論が応用生物学に、農

学に、かくも大きな影響を与えるとは誰れも考えなかったであろう。『理論より実用的なものはない』という自然科学上の理念は今も昔も変りない」。

第 8 代農芸化学会会長であられた近藤金助先生の第 2 次大戦前の講演の一部より：「食糧生産の実際に当る者は誰であろうか。農林大臣であろうか。否々。農業技術者であろうか。否々。然らば農業者農民であろうか。そうでもない。暑い日にも亦寒い日にも、夜に日を継いで、風にも雨にもひるまずに、営々として食糧の生産にいそしむのは誰であろうか。云はずと知れたこと、稲麦などの如き作物そのものである。然らば之等の作物は暑さの時、雨の時、如何様にして生産の営みをなして居るだらうか。人々はすべてこの生産のこの営みに心しなければならぬと思う。——（途中略）食糧の生産は作物の努力、農業者の愛護、農学部の精進、此の三拍子が揃って美を成すのである。人々はこの隠れたる努力、愛護、精進に対して恭敬感謝すべきである。この恭敬感謝の実が挙げれば食糧増産の実も亦挙るのである」。

ポーラログラフの世界的権威であった館 勇先生が京都大学へ赴任されたころの一文より：「私が赴任した当時（大正 14 年 2 月）、先生（志方先生；チェコスロバキア留学でわが国に初めてポーラログラフの研究を導入される）が、プラグから持ち帰られたポーラログラフ（世界で 2 番目の製品）1 台、4 ボルトの電池数個、精密抵抗器、恒温槽位に他に殆んど設備はなかった。先ず、滴水銀電極の作り方、水銀の精製法などを教わり、ポーラログラフを暗室にセットして実験にかかったが、なかなか思うような写真（ポーラログラム）はとれない。実験をくり返してやっと人目につけられるようなポーラログラムがとれたのが大正 14 年 6 月 18 日であった。わが国ではじめてポーラログラフ実験が軌道に乗った日である。この日は恰も本学の創立記念日であって休日であったが、午前中先生と二人で実験したことを覚えている。私らは本学の創立記念日をわが国におけるポーラログラフの記念日としている」。

（駒野 徹）